

日常語としての皮肉発話についての実証的研究 ——しろうと理論に基づいた新しい分類法の提案——

澤海 崇文, Joo Lee

0. 要約

皮肉は伝統的には言語学者などの専門家の定義に基づいて議論されることが多いが、専門家ではない一般の人々の思う皮肉はそれとは必ずしも同一のものであるとは限らない。しろうと理論 (Furnham, 1998) に基づき、大学生の考える皮肉発話を質的研究により分類し、ボトムアップ方式での皮肉の分類法を提案し、先行研究と比較する。調査参加者は80名の大学生で、皮肉が発話されたエピソードを自由に記述してもらった。その文字データを研究者がKJ法により分類し、合計で9つのカテゴリが抽出された。また、先行研究と同様に、皮肉発話者は多くの場合、話し手や状況に対してネガティブな感情を抱いていると判断された。

キーワード：皮肉，しろうと理論，自由記述，KJ法

1. 問題と目的

コミュニケーションや発話において、人は言外の意味にも目を向けて解釈したり、言外の意味を含めて発言したりする。そのような間接的な発話の1つとして、皮肉が挙げられる。皮肉とはどのような発言を指すのであろうか。一例として、あまり勉強をしない子供に対して親が「あなたはずいぶん勉強熱心だね」と言うのは皮肉発話だといえるであろう。アメリカ大学生を対象とした調査によると、友人同士のやり取りのうち約8%が皮肉に分類される発言であったといい (Gibbs, 2000)、これは決して少ない割

1) 流通経済大学・社会学部

2) Kyung Hee University, Center for Teaching and Learning

合ではない。間接的な物言いが重視される日本では、皮肉発話が会話に占める割合はさらに多いと思われる。本研究では日本人同士の会話の中でも皮肉発話を研究対象とし、その様相を明らかにしていく。

ただし、本研究の検討にあたっては以下の制約を設けて議論する。1つ目に、本研究は大学生の考える皮肉発話に限定する。したがって、本研究で扱うデータおよびそこから得られる結論では大学生以外の人々がとらえる皮肉発話は検討していない。2つ目に、皮肉の中でも発話されたものに限る。例えば、「皮肉な結果になった」などの使い方は本研究の対象ではない。3つ目に、アイロニー (irony) と分けて議論する。皮肉はアイロニーと似ていると思われるが、完全に同じではないという議論も踏まえ (例えば、岡本, 2010), 以下では皮肉に絞って議論を進める。ただし、先行研究の概観にあたっては、皮肉とアイロニーが同列に扱われているような文献も見受けられるため、アイロニー研究も適宜紹介する。

皮肉についての先行研究を概観すると主に3つの論点に沿って、研究が多く行われているように見受けられる。1つ目は皮肉の成立過程についてであり、どのような構成要素が皮肉の成立に必要なかという観点である。2つ目は皮肉の社会的機能についてであり、皮肉発話と字義的発話 (上記の例において「あなたはあまり勉強をしないね」と言うこと) のどちらが聞き手に対するダメージが少ないかという点である。3つ目は皮肉発話そのものについての研究であり、例えば皮肉の概念や分類法が対象となっている。本研究はその中で3つ目の、皮肉発話の分類法に該当する研究である。

皮肉発話はどのようにカテゴリ分けされるのであろうか。多くの先行研究では皮肉とみられる例に対してもアイロニーという言葉が使われているため、アイロニーの分類法を以下に載せる。Dews, Kaplan, & Winner (1995) は、アイロニーの批判 (ironic criticism) とアイロニー的賛辞 (ironic compliment) という分類を採用している。前者の例として、アイロニー的発話の聞き手がバイオリンを演奏しており、その下手な演奏に対して話し手が「とても素晴らしいね」と伝える場合であり、後者の例としては、聞き手が複数の人からダンスのパートナーになってくれないかと頼まれている場面で、話し手が「あなたはそんなに人気者ではないよ」と言う場合が該当する。要するに、各場面において予測されるような直接的な発話をせず、間接的に意図を伝えようとしている。

Leggitt & Gibbs (2000) は、アイロニー的発話に対して生じる感情的反応を検討するためにアイロニーを6種に分類している。例えば、ある人が仕事でのミーティングで重要なプレゼンテーションをしている際、同僚のディーンがその人の案にはたくさん問題があるとケチをつけてきた。ディーンいわく、昨年に同じ案を試してみたがそれは失敗し、プレゼンテーションをする前にしっかりと問題を分析すべきだったのではないかと指摘する。さらに続くディーンの発言において6種のバリエーションが想定されてお

り、「この会社では情報のやり取りが非常にうまくいっているね」(アイロニー, ironic), 「あなたは本当にプロだね」(嫌味, sarcastic), 「うちの三歳の子供でももっとよくできるよ」(誇張, overstatement), 「もうちょっと時間があればよかったかもね」(控えめな表現, understatement), 「昨年と同じようにもう一度試してみるべきだ」(風刺, satire/parody), 「プレゼンテーションとはどのようなものかわかっているのかな?」(修辭的な質問, rhetorical question) という6種のアイロニー的発話が挙げられている。

以上のようにカテゴリーカルな分類を採用している研究もあるが、度合いをベースとした議論もある。例えば西谷(1993a)は、聞き手の抱く期待(肯定的期待か否定的期待か)および発話内容とその期待との一致(一致か不一致か)という軸を土台として、発話を4種に分類している。そのうち、聞き手が肯定的期待を有していて、発話内容がそれと一致しているほど、アイロニーらしさが高いということを大学生データに基づいて実証的に示している(詳細は西谷, 1993aを参照のこと)。

また、岡本(2004)はアイロニーの発話は大きく分けると逆転型と非逆転型と自己言及があるという。逆転型アイロニーは字義上ではポジティブな発言をするがネガティブな態度の伝達が意図されるもの、非逆転型アイロニーは聞き手に言及するものだが、逆転型には当てはまらないタイプという図式を提案している。自己に言及するアイロニーは自己についての発話であり、例えば試験で0点を取った人が「我ながら立派な点数を取ったもんだよ」と発言する例が挙げられている。さらに、アイロニーの知覚という観点から、アイロニーか否かという二分法ではなく、アイロニーらしさという度合いで議論すべきという主張もなされている。

以上のように、アイロニーに関しては少なくない検討がなされているが、アイロニーと皮肉は異なるものだという立場に立つと、皮肉の分類について提案した研究はこれまでのところ見当たらない。さらに、これまでの議論では研究者の定義する皮肉やアイロニーが狙上に載せられており、研究者ではない多くの人が考える概念は十分に検討されているとは言い難い。しろうと理論(Furnham, 1988)によると、専門家ではない人が持つ素朴な考えや概念は、専門家のそれとは必ずしも一致しない。したがって、本研究では、専門家の定義する皮肉を土台としてトップダウン方式に皮肉を分類するのではなく、専門家ではない人々のとらえる皮肉発話を研究対象とし、実際に彼ら彼女らが経験した皮肉エピソードを自由に語ってもらい、そのデータをボトムアップ方式に分類していく。民族心理学(folk psychology)でも同様の議論がなされており、日常的な心理学の重要性が説かれている。Bruner(1990)によると日常的な心理学というのは、“a system by which people organize their experience in, knowledge about, and transactions with the social world (p. 35)”と定義され、一般の人々が社会で生きていくために使用する経験や知識の集合と言い換えられるであろう。一般人というものを定義するのは困難であるため、本検討では対象を限定し、大学生のとらえる皮肉発話を研

究対象とした。

予測として、これまでに専門家の定義する皮肉では見られなかったタイプの皮肉発話が、日常語としての皮肉に現れるだろうと思われる。例えば、発話者がネガティブな感情や気持ちを直接的に表現することは、伝統的には皮肉と定義されるとは言い難い。しかし、専門家ではない人から見れば、そのような発話を皮肉ととらえるかもしれない。

さらに、皮肉発話における話し手のネガティブ感情の有無についても追加で検討する。話し手が聞き手や状況に対してネガティブな感情を持っていることが、皮肉発話の成立のために必要であると仮定する理論が少なくない（例えば暗黙の提示理論、内海、1997）。本研究はその点も併せて検討する。

2. 方法

2. 1 参加者

東京都内の国立大学に通う大学生80名（男性46名、女性33名、性別無回答1名、平均年齢20.08歳）が本研究に参加した。研究参加者は、著者が研究実施時に所属していた研究科・学部独自の参加者募集システムにより応募したか、もしくは著者が学内に貼ったポスターを見て応募した。前者は、毎年更新される参加者プール（心理学系の大人数での講義の受講者が授業内にて配布される資料に基づき自身を参加者プールとして登録）より、本研究のための参加可能対象者が割り当てられ、著者が個人的に連絡をし、参加希望の意思が得られた者を研究対象とした。

2. 2 材料

調査票を使用し、参加者自身が経験した皮肉発話のエピソードを自由に記述してもらった。この際、皮肉発話を発した立場と受けた立場の両方について聞いた。参加者に自身が経験した皮肉発話を思い出してもらい、(a)発話時の状況、(b)使用された言葉、(c)聞き手の感情（参加者が話し手であるエピソードでは聞き手の感情を推測した）を具体的に記入するように教示した。なお、調査票には他にも質問項目があったが、本検討での分析には使用しないので割愛する。

2. 3 手続き

2009年の5月から7月にかけて、2.1に記述された手続きに基づいて参加希望の意思を示した者にメールで連絡を取り、静粛な部屋にて一人もしくは複数の参加者が同時に回答する形式を取った。参加者が回答に要した時間は、他の項目も含めて40分程度であった。参加者には回答終了後に十分に研究について説明を行い、謝礼として500円分の図書カードを渡して終了した。なお、上記の研究計画は実施前に学内の研究倫理審査

委員会に審査を依頼し、承認されたものである。

3. 結果

3. 1 皮肉発話エピソードに対するKJ法

皮肉発話として収集されたエピソードをすべて第一著者が眺め、単独でKJ法を行った。一連の作業は川喜田(1986)を参考に実施した。具体的には、各回答者が記述した(a)発話時の状況と(b)使用された言葉をセットにし、各エピソードにラベルを付した。そして、それらの関係性に基づき、グループを編成したところ、総計で9つの小グループが作成された。さらに、それらの小グループは大きく分けて3つのグループにまとめられた。これらのグループは、発話が何に言及しているのか(聞き手かその他か)、および言及されている事柄の聞き手にとっての評価(ポジティブかネガティブか)を基準として分類された。そして、それらのグループの解釈について図解化および叙述化を施したが、本報告ではグループ分けの結果を主に報告する。以下では、各グループの説明および具体例となるエピソードを示す。各カテゴリの特徴や下位カテゴリの名称は表1にまとめた。

統合されたグループの1つ目では5種の皮肉発話が含まれ、発話で言及される内容が聞き手に関連するものであり、皮肉発話の指示する内容が聞き手にとってネガティブな事実であると判断された。下位カテゴリの1つ目は字義的褒めと命名され、聞き手がミスをした時や聞き手に非がある時に、あえてポジティブな発言をするものである。例えば聞き手がお酒を飲みすぎて話し手が介抱したというエピソードがあり、後日に聞き手が話し手に当時の状況を心配そうに尋ねたところ「面白かったからいいけどね」と言われた例が報告された。2つ目は直接的批判と命名され、聞き手がミスをした時や聞き手に非がある時に、相手の欠点をそのまま伝えるものである。例えば、聞き手が普段から割と頻繁に文句ばかり言っているという先行状況があり、それに対して話し手が「割といつもぶつくさ言っているよね」と言う例が記述された。3つ目は疑問形を使用するタイプであり、聞き手に何らかの欠点やミスがある状況において、話し手が疑問形により本来の意図を伝えようとする発話である。例えば聞き手が母から夕食の準備を頼まれている状況で、準備に手間取り、母から「レンジでチンするのに何分かかっているの?」と聞かれた例が報告された。4つ目は両面価値的(アンビバレント)な発言をするものであり、同様に聞き手に何らかの欠点やミスが生じている状況において、話し手が賞賛と批判を同時に表明する発話である。例えば聞き手がアルバイト先でミスをしたところ、店長に「ゆっくり丁寧にやっているはずなのに、おかしいね」とポジティブな表現とネガティブな表現を組み合わせた例が書かれていた。5つ目はほのめかしによる皮肉発話であり、同じく聞き手にミスや欠点が存する時に、話し手が賞賛とも批判ともいえない

ような曖昧な発言をすることである。例として、けっこう重要な場面で失敗を繰り返す友人に対して、話し手が「前もあったような気がするなあ、覚えてないけど」と告げる場面が記述されていた。

統合されたグループの2つ目では2種の皮肉発話が含まれ、発話で言及される内容が聞き手に関連するもので、皮肉の言及する事実が聞き手にとってポジティブな内容である。

下位カテゴリの1つ目は負け惜しみと分類され、聞き手が成功した時や聞き手の長所などに対して、話し手が素直に賞賛をしない場面といえる。例えば聞き手が中国語を学習するクラスではほかの学生よりも中国語が上手であるという状況で、友人から「勉強しすぎでしょ」と言われた例が報告されていた。2つ目は洪々と賞賛をする皮肉発話と考えられ、同じく聞き手が何らかの成功を収めた時に、話し手が洪々とその事実を認めるが、しばしば不同意を示す別のサインが見られることが多い。例として、聞き手が頭の良いことを自慢しているような状況であり、その聞き手の友人が「すごいね」と字義的には賞賛している例が報告されていたが、おそらくこのような状況で言葉とは裏腹に不満そうな表情をしたり、口調が嬉しくなさそうであったりと、賞賛する時に付随すると思われる非言語的な手がかりが存在しないであろうと考えられる。

表1：皮肉発話の各カテゴリの特徴と下位カテゴリ

	グループ1	グループ2	グループ3
発話言及内容	聞き手	聞き手	その他
言及事実の聞き手 にとっての評価	ネガティブ	ポジティブ	ネガティブ
下位カテゴリ	字義的褒め 直接的批判 疑問形使用 両面価値的発言 ほのめかし	負け惜しみ 洪々賞賛	アイデンティティー言及 他者言及

統合された3つ目のグループでは2種の皮肉発話が含まれ、発話で直接的に言及される対象が聞き手そのものではなく、皮肉の言及する内容が聞き手にとってネガティブなものである。下位カテゴリの1つ目はアイデンティティーに言及するものであり、聞き手を直接指示するものではないものの、聞き手の所属する集団や聞き手の身分に触れる発話である。例として学生が普段から1限の授業に参加しない状況において、その学生の母親が「T大学の学生はいいわねえ」（注：T大学は当該学生の所属する大学）と言う場面が報告されていた。2つ目は、聞き手ではなく話し手や第三者に言及をするような発話である。例えばあまり勉強をしない学生に対して、その学生の母親が「あなたと同じ学年の人はもっと勉強しているのに」と発言したエピソードが記述されていた。

3. 2 皮肉発話エピソードのカテゴリ分け

上記の皮肉発話の分類法が明瞭であり、十分に過不足なく皮肉発話を網羅できているかを検討するため、研究目的を事前に把握していない2名に全エピソードの分類を依頼した。具体的に、上記の下位カテゴリ9つそれぞれの説明および具体例を付けた資料をコーディングマニュアルとし、そのマニュアルを2名に渡した後、その2名が個別にすべてのエピソードを「その他」も含む10種のどれかに分類した。評定者間の一致率をチェックするために κ 係数 (Cohen, 1960) を算出したところ、 $\kappa = .885$ となり、ほぼ完全な一致率だと判断された (Landis & Koch, 1977)。

一致したカテゴリはそのままとし、不一致であったエピソードは以降の度数分布からは除外した。なお、研究参加者には皮肉を発話した場面と発話された場面を記述してもらったが、ほぼ同様のパターンを示していたため、表2にそれらを合計して、皮肉発話の各種の度数分布をまとめた。字義的褒め、直接的批判、疑問形使用が最も頻繁に挙げられていたエピソードであるといえる。各カテゴリの度数が統計的に異なるか否かを検討するために有意水準5%でカイ二乗検定を行ったところ、 $\chi^2(8) = 19.34, p < .05$ となり、度数がカテゴリ間で異なっていたといえる。さらにライアンの名義水準を使用した多重比較を実施したところ、字義的褒め、直接的批判、疑問形使用の皮肉発話は負け惜しみの皮肉発話よりも有意に多く挙げられていたことがわかった。

3. 3 発話者のネガティブ感情の有無

先行研究では皮肉発話において話し手のネガティブ感情の存在が指摘されているため、本研究でも追加分析を行った。描かれたエピソードにおいてネガティブ感情があるか否かを、上記のカテゴリ分けを実施した2名に追加で依頼した。評定の結果、 κ 係数を計算したところ $\kappa = .943$ となり、ほぼ完全に評定者間で判断が一致していた。本分析では再びすべてのエピソードを使用し、二者の判断が不一致であったエピソードを分析から削除したところ、154のエピソードが残り、そのうち133 (86.4%) において話し手にネガティブ感情があると判断された。

表2：各種皮肉発話の度数分布

	カテゴリ	度数 (%)	
グループ1	字義的褒め	21 (15.56)	95 (70.37)
	直接的批判	21 (15.56)	
	疑問形使用	21 (15.56)	
	両面価値的発言	14 (10.37)	
	ほのめかし	18 (13.33)	
グループ2	負け惜しみ	4 (2.96)	18 (13.33)
	洪々賞賛	14 (10.37)	
グループ3	アイデンティティー言及	8 (5.93)	22 (16.30)
	他者言及	14 (10.37)	
	合計	135 (100.00)	

4. 考察

本研究では、しろうと理論に基づき、専門家ではなく一般の人々（本研究では大学生）がとらえる皮肉発話を対象とし、どのような種類の皮肉が報告されたかをまとめた。以下では、新しい分類法と先行研究（以下アイロニー研究も含めて議論する）との比較、分類法の有用性、および皮肉発話状況における話し手のネガティブ感情の存在について考察する。

大学生参加者の挙げた皮肉発話のエピソードをKJ法に基づき分類したところ、皮肉発話が大きく3種に分けられ、それぞれの特徴および構成要素である下位カテゴリが表1にまとめられた。順番に下位カテゴリに着目すると、1つ目に字義的褒めはこれまでの先行研究で何度も提案されており、本研究でも多くのエピソードが報告された。先行研究では例として、勉強を怠けている子供に母親が「本当に勉強熱心だね」と言う皮肉が挙げられている（岡本, 2010）。2つ目に直接的批判はこれまでのところ、先行研究で提案されているとは言い難い。ただし、一部の研究ではこれに近い例が挙げられており、テニスの上達しない高校生にコーチが「だいたい練習不足でございますね」と過剰に敬語を含めることで皮肉を伝えるケースも報告されている（Okamoto, 2002）。話し手の不満を直接的な方式ではなく、不誠実な発言など別の形に置き換えて伝えるという理論が多かったが、本研究では直接的に聞き手を批判する類の発話も皮肉であると考えられていた。しかも興味深いことに、表2に基づく、このカテゴリは決して少なくない。したがって、一般人の視点から見ると、このような発話も皮肉であると考えられていることがわかった。3つ目の疑問形使用も本研究のデータでは多く観測され、先行研究においても提案されている。例として、妻がピザを食べようとしたところ、夫がそれを平らげてしまったのに対して「私のピザはどこに行ったのかしら？」と字義的には

疑問形を使用する発話が報告されている(内海, 1997)。4つ目にポジティブな発言およびネガティブな発言を同時に含めた、両面価値的な発言が今回のデータで報告されていたが、先行研究ではこのような発話は著者の調べたところ十分に検討されているとはいえない。これまでの研究では研究参加者に対して状況やコンテキストの提示が十分になされることはあったものの、発話そのものは非常に短い場合が多い。両面価値的な発話はポジティブな内容とネガティブな内容を同時に含むものであるため、比較的長い発話となりやすい。よって、両面価値的な発話は先行研究において系統的に提案されていなかったが、大学生の考える皮肉発話に含まれていることがわかった。5つ目に、発話者の意図をほのめかすような皮肉が見られたが、これは先行研究でも多く観測される。例えば15分遅刻してきた人に対して「半日待ったよ」という発話(岡本, 2010)は、言及対象が聞き手であり、言及事実が聞き手にとってネガティブであるが、これまでの4つのどれにも当てはまらないため、このカテゴリに属すると思われる。

6つ目の負け惜しみの皮肉発話は、本研究ではあまり多く観測されなかったものの、先行研究では既に提案されている。例えば、ある人が難しいテストの問題を解くことができたことに対して、話し手が「頭がおかしいんじゃないの」と発言する例(西谷, 1993b)がこのカテゴリに対応するといえよう。7つ目の渋々賞賛するような皮肉発話は、本研究で収集されたデータのみでは確認できなかったものの、おそらく何らかの不満を表すような非言語的な手がかりが付随すると思われる。例えば、自分の勉強ぶりを自慢して「ぼくはチョムスキーを完全に理解したよ」という発言に対して、別の話し手が「ほう、完全に理解ねえ」と伝える発話が皮肉の例として挙がっているが(岡本, 2010)、おそらくこのような状況では話し手は誠実に賞賛するような表情や顔つきをしていないのではないだろうか。今後は、発話の字義的内容や先行状況だけでなく、発話者の表情といった非言語的行動に関するデータを収集するのも有効であると考えられる。8つ目のアイデンティティー言及や9つ目の他者言及といったタイプは、先行研究においては非常に少ない例であると思われる。あるとすれば、岡本(2004)で言われている自己に言及するタイプのアイロニーであろう。

以上のように、本研究で提案された9種類の皮肉発話を先行研究と対比させたところ、類似カテゴリだけでなく様々な違いが観測された。しかし、このような違いが生じた理由として、2つの原因が考えられる。一般の人々(特に大学生)が考える皮肉発話が、専門家の知識や定義に基づいた皮肉発話で取り上げられていなかったためなのか、それともただ単に「皮肉」と「アイロニー」との差異なのかという点は明らかでない。先行研究の多くはアイロニーという言葉遣いを使用しているため、もしかしたら本研究で見られた皮肉発話の一部のカテゴリが先行研究であまり見られなかったのは、それがアイロニーではなく皮肉を扱ったためであるからという可能性が考えられる。この点も今後は更なる検討が必要であろう。

以上をまとめると、専門家ではない大学生が提供した皮肉発話のエピソードに基づき、大きく分けて3つのグループ、細かく分類して9種の皮肉発話のカテゴリが抽出された。その後、その9つが十分に弁別できるかを検討するため、研究目的を知らない2名によるコーディングを実施した。その結果、評定者の間での一致率は非常に高く、本研究で提案した皮肉発話の分類法は弁別性が高く、専門家ではない人にとっても十分に理解できるものであるといえる。また、各種の皮肉発話の度数分布より、大学生にとっては字義の褒め、直接的批判、疑問形使用の皮肉発話が比較的わかりやすく思い出しやすい皮肉であることも示唆される。

続く追加分析で、皮肉発話でのネガティブ感情について、本研究で収集されたエピソードのうち、86.4%のエピソードにてネガティブな心的感情が話し手に存すると評定者に判断されていた。複数の理論で、話し手がネガティブな感情を持っていることは皮肉成立の条件であると主張されており（例えば暗黙的提示理論、内海, 1997）、本研究はそれと一貫した結果であるといえる。

以上の結果および考察より、大学生の挙げた皮肉エピソードを使用して作成された皮肉発話の分類は、先行研究と一致した種類のものもあれば、先行研究では十分に検討がなされていない類のカテゴリも抽出された。本検討ではボトムアップ方式に則って皮肉発話のカテゴリが抽出されたが、誰にとつての概念かということを明確に定義してから研究を進める重要性が明らかになったといえる。今後は、専門家のとらえる皮肉と一般人の考える皮肉には乖離があることを意識しながら皮肉研究を進める必要があるといえる。

ただし、本研究では様々な制約が挙げられる。1つ目に、研究参加者が限定的であった点である。本研究の皮肉発話を提供した参加者はすべて東京都内の国立大学の学生であり、学力が比較的高い大学であった。この点を踏まえると、他の地域での大学生、もしくは社会人のとらえる皮肉発話は異なる可能性がある。2つ目に、本研究の想定する皮肉発話は基本的に話し手と聞き手の二者のみが存在するようなものであった。しかし、発話に限らずコミュニケーション全般においては、第三者がいるような場合も想定される。例えば第三者に不満がある場合に、話し手が聞き手に皮肉発話を伝え、話し手の不満を第三者に理解してもらうようなケースもありうる。以上のように、他の母集団での検討や、異なる文脈での検討が今後望まれる。

引用文献

- Bruner, J. (1990). *Acts of meaning*. Cambridge, MA: Harvard University Press.
- Cohen, J. (1960). A coefficient of agreement for nominal scales. *Educational and Psychological Measurement, 20*, 37-46.
- Dews, S., Kaplan, J., & Winner, E. (1995). Why not say it directly?: The social functions of

- irony. *Discourse Processes*, 19, 347-367.
- Furnham, A. (1988). *Lay theories: Everyday understanding of problems in the social sciences*. New York: Pergamon Press.
- Gibbs, R. W. Jr. (2000). Irony in talk among friends. *Metaphor and Symbol*, 15, 5-27.
- 川喜田二郎 (1986). KJ法—渾沌をして語らしめる 中央公論社
- Landis, J. R., & Koch, G. G. (1977). The measurement of observer agreement for categorical data. *Biometrics*, 33, 159-174.
- Leggitt, J. S., & Gibbs, R. W. Jr. (2000). Emotional reactions to verbal irony. *Discourse Processes*, 29, 1-24.
- 西谷健次 (1993a). 聴者の期待がアイロニーの非対称性に及ぼす影響 読書科学, 37, 53-60.
- 西谷健次 (1993b). アイロニーの状況特性と含意 計量国語学, 19, 117-132.
- Okamoto, S. (2002). Politeness and the perception of irony: Honorifics in Japanese. *Metaphor and Symbol*, 17, 119-139.
- 岡本真一郎 (2004). アイロニーの実験的研究の展望—理論修正の試みを含めて—心理学評論, 47, 395-420.
- 岡本真一郎 (2010). ことばの社会心理学 第4版 ナカニシヤ出版
- 内海彰 (1997). アイロニーとは何か?—アイロニーの暗黙的提示理論 認知科学, 4, 99-112.